

もつと馬を
吉永みち子

平凡社



PICARO TARO

よしなが・みちこ 1950年埼玉県生まれ。72年東京外語大インドネシア語科卒。競馬専門誌『勝馬』の記者を経て、『日刊ゲンダイ』の競馬記者となり、77年吉永正人騎手と結婚。『気がつけば騎手の女房』で第16回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。ほかに『気がつけば三十なかば』、『気分はグリーングラス』、『吉永みち子のさわやかトップ訪問』、『繋がれた夢』など。

もっと馬を！

1990年11月15日 初版第1刷発行

著者——吉永みち子

発行者——下中 弘

発行所——株式会社平凡社

郵便番号 102

東京都千代田区三番町 5

振替東京8-29639

電話東京03-265-0465(編集)

03-265-0455(営業)

印刷——株式会社東京印書館

製本——大口製本印刷株式会社

ISBN4-582-82385-8

©Michiko Yoshinaga

1990 | Printed in Japan

乱丁・落丁本のお取替えは直接本社読者サービス係まで
お送り下さい(送料小社負担)。

NDC 分類番号645.2 四六判(19.4cm) 総ページ224

土

ち馬を
平凡社



蘇工業学院図書館
藏书章



もつと馬を！ 目次

目次

木曾馬の村

8

北の果てのばんばレース

26

サーカスの馬

44

相馬野馬追祭り

62

騎手候補生の長い一日

80

馬で行ってきます

100

馬市を仕切る人々

120

ホースマンの果てなき夢

138

戦場の馬

156

馬力がものをいう坂段の町

174

子供たちの特権

192

ホースサミットのゆくえ

212

装画..真鍋太郎

アート・ディレクション..山岡 茂(スタジオ・ギヴ)

デザイン..豊島貴子

もつと馬を！

木曾馬の村

長野県木曾郡開田村。長野県と岐阜県の県境にそびえる御嶽山の麓に広がる高原の村の郷土館には、木曾馬最後の純血馬である第三春山号の剥製が置かれている。短くて太い首と長い胴、背中に一筋走った黒っぽい毛、大きな顔にいかにもおとなしそうな目が両側に開きかげんについている。精巧な剥製となった第三春山号は、「これが木曾馬の姿だったのだ」と全身で訴えているように、大きなガラスケースに納められて立っていた。

第三春山号が死んだのは、昭和五十年一月十七日。二十五歳。名古屋大学で安楽死させて、内臓と骨格は学術研究用に大学に保管され、残った皮で剥製がつくられたのである。木曾馬の寿命は大体二十年であるから、ほぼ天寿を全うしたといえる年齢だが、安楽死と剥製による永久保存の計画が知れるや、賛否両論がうずまいた。

まさか十五年後にその第三春山号に会いに来ることになるなどとは知る由のない私も、

当時の新聞の三面記事を賑わした論争のことは鮮明に記憶している。動物愛護協会や日本獣医師会も反対の立場を表明していた。けしからん、自然死を待つて剝製にすればいい、いや剝製にするなど許せないといった抗議の手紙や電話が毎日のように開田村に寄せられたという。

老衰による骨軟化症や黄疸の症状の出始めた第三春山号は、やがて衰弱して、関節も曲がつていくだろう。そうなつてからでは、後世に木曾馬の正しい姿を伝えることができない。手塩にかけて実際に第三春山号と暮らしてきた人の、剝製ではなく標本として木曾馬を残さなければならぬという決意が含む悲しみや憤りの前に、命を大切にという合唱はどこかトンチンカンに聞こえたものだ。木曾馬の命をもっと大切に考えていたなら、最後の純血馬などという事態にはならなかつたろうにと漠然と新聞の字面を眺めていた私は、当時サラブレッドに夢中になりかけていた頃で、日本の歴史の中で人間とともに暮らしてきた在来馬がどのような運命にさらされていたのかまでは、考えようとしないうちに、競馬に明け暮れていた。

木曾谷は自然の景観は素晴らしいが、農業生産の条件はよくない。太陽の射す時間の短い山間の農地を耕し、荷物を運搬し、厩肥をつくる。木曾義仲や宇治川の先陣争いで名を

馳せた木曾馬は、平和な時代は農民の生活になくなくてはならない存在として、千五百年に及ぶ歴史を刻んできたのである。

明治の中期から大正にかけては、実に六千頭の木曾馬が飼養され、北海道や南部地方と並んで木曾は有数の馬産地だった。それが、もともとも頭数の減った昭和五十一年には僅か三十一頭。約二百分の一、まさに激減してしまったのである。現在、木曾馬保存会の努力で、日本全国では百頭前後。いくらが増えてはいるが、絶滅の危機が去ったわけではない。しかも、第三春山号以降は純血馬はなく、木曾馬に極めて近い形の馬が残っているという状況なのだ。

単に必要性がなくなったにしては、あまりに激しい減り方である。木曾馬の身にどんなことがふりかかったのか知りたくて、木曾馬保存会の会長をずっと務めてきている伊藤正起さんの家を訪ねた。伊藤さんは、開田村の元村長で、獣医でもある。

御嶽山が一望できる庭先に厩がある。しかし、その中にいたのは馬ではなく、白い秋田種の老犬だった。表札の名の不二富号は、第三春山号の孫に当たり、去年から開田村が保存会に運営を委託している木曾馬牧場に預かってもらっているのだそう。

伊藤さんは七十八歳と老齢の上に、去年病氣をしてすっかり足が弱って、いよいよ世話



御嶽山を望む長野県木曾郡開田村の景観

をするのがむずかしくなつたと、寂しそうに言った。木曾馬と子供の頃から一緒に育ち、保存に熱意を燃やしてきた保存会の人たちもだんだんと老齢になり、個人で飼うのはむずかしくなつてきているのだという。

薪のストープを置いた囲炉裏に座り、痛む足をかばいながら、伊藤さんはあくまで穏やかな調子で話した。

「かつて、日本には百五十万頭の馬がいたけれど、今は全種で三万頭ぐらいでしょう。どこの国でも減つたんでしょうが、これだけ一気に減らす国も珍しいですね。まあ、もう必要なくなつたことですよ」

地域の生活に重要な役割を果たしてきた日本の在来馬が、社会の情勢や産業構造の変化によって存在理由を失つて、そのために頭数が減つていかざるをえなかったのは、木曾馬も例外ではない。ただ、木曾馬の不幸は、世の中がまだ馬を必要としていた昭和の初期、馬格が小さいから軍用馬に適さないとして、改良を命じられたことに始まる。

体高が百三十センチから百三十五センチくらいの木曾馬は、軍の望む体高四尺六寸五分（約百四十センチ）という条件を満たさない。つまり、軍馬として使えないわけで、一大馬産地である木曾がこれでは困る。そこで、アングロノルマン系の種馬による品種の改良を

推し進めようとしたが、農民の強い抵抗にあつてだ**い**ぶ難儀したようなのである。

「それはね、こういうことなんですよ。木曾馬がなぜこの地でたくさん飼われたかという**と**、まず粗食に耐えること。ここはそんなに食糧事情がよくないですから。草だけでまるまる太っている木曾馬は、人間と競合することなく暮らしていけたんです。それにここでは、馬の世話をするのは女の人と子供だったわけです。あまり大きくない体格は扱いやすくてちょうどよかったです。おとなしくて、やさしいとされる木曾馬の性格は女の人や子供がかわいがつて育てる中で培われたものでしょうね。さらに後肢がX脚になつていて、山道を降りるのに非常に都合がいい。これが大きく改良されることは、農民にとってはありがたいことではなかったんです。一寸倍^{いっすんばい}”つて言葉知つてますか。馬は一寸、つまり三センチ体高が高くなると倍の飼料がいるつてことなんです」

国の改良、増殖の目標はあくまで軍馬としての理想を追うために体格を大型化させることであり、それは木曾馬の歴史や産地の条件をあまりに無視したものであったといわなければなら**な**い。無理強い**は**、かえつて純血種の良さを木曾谷の人々に再確認させる結果になり、むしろ在来種を守る方向へかりたてたものと思**わ**れる。

しかし、ささやかな農民の抵抗は長くは続かなか**つ**た。軍国化が進む中で昭和十一年か

ら第二次馬政計画が実施され、さらに昭和十四年には種馬統制法が制定され、それによって木曾馬系の種馬による産馬は禁止された上に、民有の牡馬は一頭残らず去勢淘汰されることになってしまったのだそうだ。

「改良されない馬、つまり在来馬は無用と強制的に法で決められたことです。私は戦争中は南支（中国南部）に行っていて、二十一年に帰ってきた時には、すでに木曾馬は断種されていたんです。法で定められ、従わないと罰則規定もあるわけで、農民もどうすることもできなかったんでしょうね」

終戦とともに、今度は軍馬の必要がなくなり、木曾馬の種を絶った種馬統制法は消えたが、木曾馬にとっては遅すぎた。

木曾馬を復元したい、かけ戻したいと願った木曾谷の人たちは、純血馬の登録制度をつくって、保存のために立ち上がった。しかし、何といっても純血種の種馬がいないことには話にならない。

「昭和二十五年でしたかね。奇跡的に去勢されていない純血種の牡が一頭だけ見つかったんです。八幡の神社に神馬として献上されていた馬で、戦争中に何度も去勢するように命令されていたらしいけど、神様の馬が血を流してはいけないうんで、体調が悪いと

か軍に言い訳しながら終戦まで頑張ったらしいですね。事情を話してこの馬を払い下げてもらった。この神明号と、純血の牝馬の鹿山号との間にできたのが、今郷土館で剥製になってる第三春山号なんです」

木曾馬を愛する人たちにとって、大事な種馬になれる牡馬が生まれたことは大変な喜びだったに違いない。

ただ、第三春山号が種馬として働けるまで成長した頃には、今度は純血の牝馬が老齢で子供が産めなくなってしまうて、なるべく木曾馬に近い体型の牝馬で、せめて木曾馬に近い馬を残すのがやっとなった。さらに昭和二十年代の終わりには、農機具や自動車がすごい勢いで普及していった。厩肥にかわるものとしての化学肥料もできた。

復元に心血を注いでいるうちに、時代が馬を必要としなくなってしまったのである。馬を生産しても、馬市に買いにくるのは農家の人ではなく、ハムやソーセージの材料を買い求める肉屋ばかり。殺されるくらいなら馬を飼わなくなった家も多い。

たった一頭の純血馬として貴重な第三春山号を所有していた長野県では、もう馬を生産する農家がなくなった時点で、第三春山号を売ることに決めた。当時、開田村の村長だった伊藤さんは、祖先が残した遺産として木曾馬を保存することの重要性を話し、第三春山